外来高齢者における医薬品適正使用の推進に向けた薬学的管理業務の質評価指標の運用に関する実証研究

串田 一樹 ●昭和薬科大学 地域連携薬局イノベーション講座 特任教授



外来高齢者薬物療法に関する質評価指標開発：エキスパートパネル

1.背景と目的

高齢者は、加齢に伴う生理機能の低下および服用薬剤数の増加により、薬物間相互作用等の問題が生じるリスクが高くなることが知られている。これらのリスクを早期に発見・解決するためには、薬学的見地から処方内容や患者の状態を評価する薬剤師の活躍が期待されている。しかし、薬剤師の資質のバラつきや、多職種間の薬剤師に期待する役割の相違により、薬剤師が本来の役割を発揮できておらず、結果として高齢患者の医薬品適正使用が実現できていないことが少なくない。

そのような中、近年、Quality Indicator（QI）と呼ばれる質評価指標を用いて、ケアの質を測る取組みが主に先進国で広がっている。QIは通常、薬物療法ガイドラインの順守率を%で表す。これにより自身が提供するケアの現状把握が可能となるだけでなく、PDCAサイクルを回すことで、目標達成への進捗を経時的に把握することができる。しかし、薬局薬剤師による外来高齢者ケアの質を評価するQIの開発・運用はいまだなされていない。

本研究は、2018年・2019年に厚生労働省により取りまとめられた「高齢者の医薬品適正使用の指針」を基に開発されたQI129種類を薬局で6か月間運用することで、以下の3点を明らかにすることを目的とする：1. QIの指標特性の評価、2. QIスコアと各種加算算定回数との関係性、3. QIを用いた質改善活動のメリット・デメリット。

2.取組みの方法／期待される成果

薬歴データを用いた6カ月間前向き観察研究（量的研究）とインタビュー（質的研究）を組み合わせた混合研究法を採用する。また、全ての医療従事者を対象とした報告会を開催し、本研究より得られた高齢者に対するケアの現状と課題を多職種間で共有し、知見を広める機会を作る。

・量的研究：全国から約100薬局の協力の下、事前に開発した適切性が担保された外来高齢者に対するQI129種類を用いて、6剤以上の内服薬を4週間以上服用している75歳以上の高齢患者を対象にケアの質を6カ月間評価する。

・質的研究：前向き研究が終了した後、参加薬局の薬剤師、およびその連携している多職種を対象としたインタビューを行い、QIを用いた質改善活動に対する意見を集約・解析する。

本研究によって、薬局が提供する外来高齢者ケアの現状を把握できる。また、高齢者の医薬品適正使用を推進する上で特に有用な指標を特定できる。加えて、質改善活動は多職種連携が不可欠であることから、多職種連携の質も向上することが期待できる。